

「第10回 大月みらい協議会(人口問題・地域活性化を考える市民会議)」 会議概要

日 時 平成27年11月12日(木) 午後7時から午後9時

場 所 大月市民会館 4階視聴覚室

出席者 委員16名(4名欠席)

小笠原則雄、小俣理美、梶原崇照、小鷹侑子、佐藤茂幸、志村淳、志村賢二、
中島啓介、仁科美芳、新田澄郎、福嶋尚美、藤井真弓、星野喜忠、三木範之、
武者稚枝子、山口明秀

【大月市生きがい創生委員会】 石井市長、天野教育長、石井総務部長、井上市民生活部長、
市川産業建設部長、兼子教育次長、上原消防長、星野中央病院事務長

【事務局】 企画財政課上條課長、地域活性化担当石井リーダー、榎本、堀内、山田

1. 星野議長あいさつ

皆さんこんばんは。今回もお忙しい中お集まりいただきありがとうございます。今日は、石井市長をはじめ、大月市生きがい創生委員会のメンバーの皆様にもご参加をいただきました。この会議は第10回となります。その間、部会を通じて、場合によっては6回も7回も会を重ねていただいたかと思えます。当初、82のアイデアの提案が出ましたが、その提案を絞り、3つのグループに分けて部会を結成しました。今日は、その中で、私たちの住む大月が、将来こんな風になってほしい、こんなことを考えたらどうだという点をアピールするために今回プレゼンテーションの会を開きました。発表する提案は、中にはまだまだ詰めなければならない点もあろうかと思いますが、とりあえずは一つのステージに来たと考えております。プレゼンテーションの進行は佐藤副議長にお任せをしたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

2. 石井市長あいさつ

皆さんこんばんは。1年たつのは早いもので、今年もあと1ヵ月と少しという状況になりました。気候についても日が短くなってきて、朝晩の気温が低くなってきている中で、皆さん方には、それぞれ健康管理は十分ご留意されているだろうと思いますが、どうか風邪などひかぬように、残された月日を鞭打ってがんばっていただきたいと思えます。

このような遅い時間に、もう10回も開催しているということで、大月みらい協議会の皆さん方にはお骨折れいただきおまして、私どもは頭が下がる思いであります。これから大月市がどんな方向に進んでいけるのかという意味でも、重く大きなテーマであろうと思っ

ておりますし、その産みの苦しみの中で、皆さん方がいろいろな知恵を出していただいていると思っております。いずれにいたしましても、大月の将来を、我々と皆様方が力を合わせて、明るい展望まではいかないまでも、この大月が生き残れるまちづくりを目指していかなければいけません。

本市は10月に人口ビジョンを策定しました。その中で、本市の平成26年の合計特殊出生率は1.15という数値でしたが、今後はこの数値を徐々に上げていく対策を講じ、25年後には1.80という数値まで伸ばしていき、社会増減においては、転入と転出の差をプラスマイナスゼロにし、25年後の大月市の人口を19,000人という目標を設定させていただきました。これには相当な努力が必要であろうかと思いますが、目標を掲げながら、目標に向かって、全力で皆さん方の英知を結集し、対策を講じていくことが、これから我々に課せられた大きな責務だろうと思います。

今日は、大月みらい協議会の皆さんの企画提案のプレゼンテーションを行うということで出席をさせていただきました。また、大月市生きがい創生委員会のメンバーも、このプレゼンテーションに期待を持って参加させていただいております。どうかこれから、これを一つのきっかけといたしまして、さらにこの状況を深めていくすばらしい時間としていきたいと思っております。皆さん方のご提案にご期待申し上げながら、今後、十分健康にご配慮なされましてがんばっていただきたいと思っております。これまでの委員の皆さんのご労苦に感謝申し上げ、一言ご挨拶とさせていただきます。よろしくお願いいたします。

3. 企画提案書のプレゼンテーション

【佐藤副議長】

皆さんこんばんは。今日は企画提案書に基づいてプレゼンテーションを行うということで、ここからは私が進行役を務めさせていただきます。発表の手順ですが、お手元の資料の一覧表に従って発表をお願いいたします。全部で16の提案が出ていますが、それぞれのグループでまとまっていて、Aグループが2本、Bグループが1本、Cグループが13本となっています。それではAグループからお願いします。Aグループのテーマは「雇用の創出」「交流・移住・定住対策」についてです。

(1) Aグループ発表

<提案①>：〇〇都市宣言を行い周囲にPRする

【志村賢二委員】

Aグループ富浜町の志村と申します。よろしくお願いいたします。Aグループでは、提案を行うに当たり最初の会合のときに話し合った中で、国が進めていく人口問題対策は、恒久的かつ継続的に発展を目指すことが経営方針としてならなければならないという話になりました。企業も同じですが、これは非常に大事なことで、1本の基本が整っていなければ

いけません。提案1つ1つの個性の優秀さはもちろんのこと、市として一貫性のある経営方針こそ、より多くの人や関係する他地域の方々も納得させ、市としての独自性も増して上で非常に重要です。また、市として掲げた方針をどのようにPRしていくか、まわりの市や県や国に理解していただいて、ご協力いただけるかということも、大月の未来を考える上で非常に重要なことだと考えております。

大月市は既に桂川の流域連携やバイオマス発電などの資源が経営方針として示されています。これらを念頭に踏まえながら、大月市のイメージを大きく広げられるようなキーワードを作って、世界にそのキーワードをPRしていくべきだと考えました。

経営資源というキーワードと、事業の提案のイメージを木の絵にしてみました。木が大きく育つためには太い幹が必要です。その幹が枝を伸ばして分かれていくイメージです。テーマに沿って枝を広げるような提案が、振興策となっていくものに実っていきます。

この絵を踏まえながら、次のページにおいて、「〇〇都市宣言」と置きました。前回の会合のときに、良いアイデアがあり過ぎて1つに絞りきれませんでしたでしたが、大事なことは、大月市のイメージを良い方向に転換することと、ブランド化することです。大月市は大都市に近い、豊かな自然があるということが、他の市には中々ない経営資源であると思います。東京から80km圏内において、大月市は唯一残った未開の地と言っても過言ではないと思います。そういう経営資源をイメージでブランド化できないかということが私たちAグループで話し合った内容です。この先、提案の1つ1つを大きなテーマに沿った形で進めることによって一貫性が生まれて、やがて独自性の高い提案になると考えました。ただ、この仕組み自体がメディアや国、大都市が興味を持ってもらって、連携できるかということが大きな課題としてありますが、このテーマを奇抜なやり方とくっつけて行うことでできないかということと考えました。

次のページでは、例えば「環境」というキーワードを引用して、先ほどの木のイメージに当てはめて進めてみようと思います。大月市が環境都市宣言をした場合、より多くの方へPRするためにはどのようにすればよいのかシミュレーションをしてみました。できるだけお金を使わず、多くの方に知ってもらうためには、特別な手法を用い、メディアや国、他県に知ってもらい巻き込んでいくことが必要です。例えば、木の幹に「環境」が来るのであれば、その先に「ぜんそくの子どもを持つ世帯の移住」や、「アレルギー世代に対しての杉林の伐採」等を提案した場合、その関連する内容を繋げて、国や大都市にPRします。例えば、大月市は空気がきれいなのでぜんそくのある子どもたちを受け入れます。いかがですか？ということ厚労省や東京都にPRをしていくのです。できるだけ手間とお金をかけずに大月市をPRすることができるのではないかと考えました。

また、それが広がった先に、実際の振興策があります。私たちも振興策を行うことが最終的な目標だと思っています。振興策を行うためには、着手できるまでの幹となる部分が必要であり、そういう意味での「〇〇宣言」と捉えていただければと思います。非常に抽象的な話ではありますが、大月市を他の市から見たとき、あるいは10年後、20年後を

考えたときに、大月はこんな市だということを、胸を張って言えるようにできればと考えます。以上で提案を終わります。

<提案②>：地域デザイン学習会による「8つの小さな拠点+新事業」構想プロジェクト

【佐藤副議長】

Aグループの2つ目の発表をさせていただきます。Aグループは雇用の創出がテーマです。従って雇用を創出するためには新しいビジネスを興していかなければいけません。大月市は広いので、国土交通省が掲げている「小さな拠点」事業を採用して、8つの拠点を位置付け、それぞれの課題を整理しながら、プラスアルファとして新しいビジネスを興していきたいと思いますという提案です。

この企画を提案するに当たり、私自身、原点が2つあります。1つは、地域を活性化する、あるいは新しいビジネスを立ち上げるにはやはり時間がかかるということを大月みらい協議会の活動を通じて実感しました。もう1つは、地域のデザインを考えながら、時間をかけてやっていく必要があるのではないかとということでした。誰か1人が考えるのではなくて、地域の学び舎の中からそれを体系化していき、事業を企画していく必要があると思いました。実は1週間前に、南アルプス市のフォーラムに行ってきました。地域デザイン学会という学会で、私もそこに所属しているのですが、南アルプス市に提案をしてきました。2日間のプログラムで提案書をまとめて、南アルプス市の市長さんの前で提案しました。そこで地域デザイン、学び舎の必要性を実感しました。

そして、大月みらい協議会でも議論しましたが、何をやるかということは大事で、やることはいっぱいあるのですが、それをいかにして進めていくか、その難しさをひしひしと感じました。従って、どのように進めていくのか、どのようにやっていくのかということにスポットを当てて今回企画をしました。それについて紹介していきたいと思います。

この間の南アルプス市の活動ですが、話題となっている「完熟農園」について、そこを拠点に観光ができないかという話をしてきました。2日間でしたが、抽象的ですが、提案を3つくらいに絞ってまとめました。完熟農園を核とした通年型の観光が出来ないかという具体的な提案を行いました。この提案を説明することが今日の主旨ではありませんので、行って来たということだけ報告させていただきます。地域デザインという、地域をどのようにしていくのかということは、時間をかけてやっていく必要があるなど実感しました。そのような観点で発表させていただきます。

総合戦略の策定期間である4年間ないし5年間をかけて、大月市に8つの地区を設定して、その小さな拠点を中心に生活の基盤を作っていきます。それにプラスアルファして新規ビジネスを立ち上げていきます。これには時間がかかるので、その新規ビジネスを立ち上げるために、各地区に地域デザイン学習会を発足させて、地域の事業プランを作成していきます。事業プランを作成すること自体が、4年間ないし5年間の計画となります。その過程において、若手の地域リーダーを養成するとか、実行組織等が発足させたりします。

そのような活動を通じて、市民力を向上させていきます。地域住民は行政に対して陳情します。これはこれで大事だと思うのですが、市民が自ら政策提言して、場合によっては行政と連携してそれを実現していく。これからはこんな姿が求められています。

手法として、まず小さな拠点というのは、皆さんご存知の方が多いたと思いますが、国が提言をしています、小さな集落を取りまとめ、廃校舎や公民館を利用して、そこを中心にたまり場や交流の場を作っていきます。そこを中心に生活の場を作り、地域のコミュニティを作っていくという構想です。これを大月の7つないし8つを拠点にして作っていくということです。具体的にどうしていくかということは、それぞれワークショップ等で詰めていきます。そこに新たなビジネスを構想していったらいいかなと思います。いわゆるコミュニティビジネスです。例えば笹子地区であれば、笹一酒造と連携して6次産業化につなげていくとか、あるいはエコの里であれば、アグリツーリズムを一生懸命やっていますので、そういったビジネスを小さな拠点のプラスアルファとしていきます。それ以外でも、コミュニティカフェや、ものづくりとか、アートとか、あるいはサテライトオフィスとか、いろいろなテーマでコミュニティビジネスを考えていければいいのかなと思います。それぞれの8つの拠点に、地域の実情に応じて4年間ないしは5年間かけて構想していくということです。そして、大月の駅前を中心に、8つの小さな拠点を束ねる里の駅みたいなものを1つ作って、それをハブ機能として大月全体を束ねる必要があるかと思っています。

具体的な進め方ですが、5年間のスパンで考えました。例えばですが、まず初年度の2015年は、準備委員会を大月短大に作って、8つの地区に準備組織を設定します。2016年度に勉強から始めます。先ほどの地域デザイン学習会のようなものを地区ごとにやっていきます。そこで勉強しながら、あるいは地区住民のニーズの調査等を行います。2017年度には、8つの構想（プロジェクト）を作って、具体的な事業計画を作って、全体のプレゼンテーションを行います。2018年度はラフな企画から詳細な企画にしてきます。2019年度は、小さな拠点のプレオープンをするとか、実証実験を行います。このように、時間をかけながらやっていったらどうかと考えました。プロジェクトの組織イメージは、外部の方も入ります。場合によっては、我々のような教育者や専門家も入っていきます。特に若手を中心に10名くらいのメンバーでやっていけたらと考えています。

まとめになりますが、背景にあるものとして、市民側の問題には、私も含めてですが、まだまだ市民力が大月市には不足しています。市民力をアップするために、このような事業計画を作って、検討することをやっていく必要があると思いました。また、行政側の問題には、この大月みらい協議会もそうかもしれませんが、市民力を政策に反映させるノウハウがまだまだ不足しているのではないかと思います。大月は広いので、そういったことを地区ごとにやっていくことによって、地区ごとのニーズを拾い上げるような仕組みに繋げていけるのではないかと考えました。最後に大月短大の問題ですが、地域に対して、まだまだいろいろな提言が出来ていません。様々な企画提案を通じて、何らかの貢献が出来るのではないかと考えています。以上になります。ありがとうございました。

(2) Bグループ発表

<提案名：大月市民の叡智を集結！情報共有による相互扶助>

【発表者：中島啓介委員】

あらためましてこんばんは。大月市民の叡智を集結！情報共有による相互扶助ということで、提案させていただきます。具体的にどういうことかと言うと、情報の発信です。先ほど、情報の発信やPRということについて、AグループやCグループの方も注力していく必要があるということで皆さんうなずいていましたが、その部分をピンポイントで狙った事業となっています。

背景としては、悪いところは、大月市だけではなくどこにでもあります。そういったところばかり目にしていると、どうしても悪い感情や雰囲気全体に広がってしまいます。皆さんご存知のとおり、大月市にもいいところはたくさんあります。そういったところらでどんどん目を当てよう。そういった情報をどんどん収集して、どんどん発信していこうということが基本的な発想となっています。そのような気持ち、いいところの発信によって、気持ちが良い方向となっていくことをピグマリオン効果と言いまして、そのような効果があるそうです。

続いて、発信の手段としては、メディア、書面、新聞等たくさんありますが、インターネット、特にSNSを利用して発信します。フェイスブック、ツイッター、ブログ、ホームページなど。そういった媒体を使って情報の発信を行います。また、大月のいい情報は、大月市の観光協会と十分連携して、やっていった方がいいかなと思います。補足ですが、私たちのBグループには、観光協会の会長を務めている天野委員さんがいらっしゃいまして、その点に関しては私も賛成だと言っておりました。そういった形で、とにかくいい情報を、インターネットを通じて発信していきます。

また、そういったことは、特定の専門としている方がいれば継続できます。最初の企画提案名にあった、大月市民の叡智の集結という部分で、大月市職員のOBの方や、大月に住んでいる方でスキルがある方は、探せば絶対にいると思います。そういった人材をどんどん集めて、協力を仰ぎながら、活動を行っていきます。

いいところを発信することはもちろんですが、当然ながら大月市には改善すべき問題点は存在します。その情報の収集も同時に行います。ただ、その発信は控えたいと考えています。どういうことかと言うと、情報の収集を行って、いいところの発信はどんどん行います。悪い部分の発信を行うと、悪い雰囲気といえますか、問題点ばかりに目が向いてしまうことになり兼ねません。悪い情報については、収集した後に協力している方で共有します。そして、解決するために、また別の手法、別の企画をもって改善を目指します。

この企画を実行するためには、具体的に組織を立ち上げることが重要です。同じような情報を発信している団体はたくさんあるので、そういった団体と連携を深めながら、継続性のある組織を立ち上げることが、我々の部会の提案です。継続性のある組織がどのようなものかいいのかこれから詰めなければいけませんが、今のところの構想としては、

我々の団体が中心となってNPO団体を立ち上げるというような形でありますが、とにかく継続性が大事です。一旦始めたら、すぐに終わってしまったら全く意味がありません。継続性に主眼を置いて進めたいと考えています。

次に、収集した悪い情報に基づいた事業については、いいところを発信する組織と別のところで行います。最初に立ち上げられた組織は情報の収集と発信であって、3年から5年後には、収集した情報に基づいて、問題点の提起と、解決のための取り組みや新しい事業を行っていく有益な組織を目指します。

企画の提案としての発表は以上ですが、先ほど、同じ部会のメンバーの小鷹委員からいただいた、悪い情報がありますので紹介します。

【小鷹委員】

Bグループの小鷹です。この提案について、じっくりというのもいいのですが、私自身はスピード感がほしいと思いました。せっかく温まったいい企画が、10年後、20年先ということになると、生きていないかもしれない、結果が見られないかもしれないと思うからです。私は性格的には走りながら考えて実行するタイプです。何時かの新聞に女性議員を野次る記事がありました。「野次っている間に人口減少」という見出しです。野次っている場合ではありません。私たちもいい企画を出し続けている間も人口減少が進んでいるのです。これはもったいないと思いますので、ある程度のスピード感がほしいなと思いました。Bの企画はネットを使っての発信ですので、Aのいい企画も、Cのいい企画もBの企画に乗せるというメリットがあります。BグループはAグループとCグループの援護射撃できる企画だと思います。

先ほどの驚いた情報ですが、鳥沢駅が建替えを行うようなのですが、トイレがないんです。トイレのない駅って聞いたことがありません。鳥沢駅にはいい季節になると登山客がいっぱい利用します。扇山に行くときに、富士急の大型バスも1台に乗りきれないくらいのおきもあります。JR八王子支社によると、鳥沢駅はトイレなしの駅になるそうで、そのことで私もびっくりしています。情報ってすごく大事だなと思いました。以上です。

(3) Cグループ発表

【発表者：山口明秀委員】

皆さんこんばんは。中々会議を欠席することが多く、ここへ来て突然発表ということになりましたが、Cグループは月に2回から3回ずつくらい部会を開いていました。私はその経緯を教えていただきながら今日に至りました。当初、個々に宿題を出して、持ち寄り、まとめようと試みましたが、人材育成・教育ということに関して話せば話すほど奥が深くなっていきました。幼児期・小学校・中学校・高校という教育の中で、幅広くなってきます。そのようなことから、どうしてもまとめきれなかったのです。完成したものを出すというより、ここまで議論した過程を出すことになりました。13個の提起というか、ここま

で話し合ったことを発表させていただきます。

まず、各提案には背景があり、それをまとめてみました。子どもの話になるのですが、文明の利器で遊ぶことが多くなり、体力や精神的な忍耐力の低下が懸念されるのではないかということ。また、幼児期から「文字」に始まる教を急ぐ風潮があるということ。さらには、大月市第2期教育振興基本計画の中では、算数（数学）の授業の内容があまりよくわからない小学生が12.6%、中学生で34.2%であることがわかりました。これは平均と似たり、高かったりします。そして、もっと目についたことは、テレビを見ますかという問いに、2時間以上見ると答えた小学生が67.8%、中学生が64.8%でした。これは全国平均の66%と比べて、特に小学生がテレビを見ていて、こんなに自然があるまちの中で、これだけテレビを見ているのもどうなのかなという疑問を覚えました。運動能力をみても、全国平均とほぼ同じ状況でした。都会とあまり変わらないということはどういうことなのか。「自然が多いまちだ」と言っている割には体力が他と変わらないということもいかなものかという疑問が出ました。ただ、特に目立って良い部分として、地域のイベントや参加状況は、他県に比べ良い結果となっていました。地域のイベントに子どもたちが参加していることは誇れることだと思いました。

もう1つの背景として、教育を行うにあたり、学校の先生がものすごく多忙という状況があります。9時、10時まで煌々と学校の明かりが付いています。教育を学校の先生ばかりに押し付けているのではないか。そうすると、楽しい授業づくり、先生と子どもがしみじみと向き合える学校づくりが出来なくなるのではないか。楽しい授業づくりをしてもらうためには、先生が余裕を持って、ゆとりを持つことが必要であると考えました。学校では出来ないことを地域に依頼して、地域が一緒になって子どもを育てていくことが必要ではないかと考えました。

もう1つは、親の方になります。共働き世帯の増加により、家族の向き合う時間も少なくなってきているのではないかということです。子どもが本来、育てられる姿は置き去りにされているのではないかと考えました。共働きによって、学童教室に預けることが多くなり、そこでは放課後に外で遊ぶことも危険だからということで教室の中での活動が多くなり、お父さんお母さんが迎えにくる6時くらいになるまで、その中で待っているという状況があります。昔は外で遊ぶことで自然の中で育まれてきましたが、そういったことも今はできない状況が、都会、田舎と問わず、時間・空間・仲間が失われているのではないかという意見がありました。

そこで出た提案が、「教えないで教える教育を!」、「絵本（お話）で包む豊かな大月市」「子育て時代のワークシェアリング」「味も匂いも本物の地元食材で食育を」というものです。この提案に関しては、主に幼児期のことをテーマに描いています。

また、「各学校区に地域を上げての学校応援団組織を作る」「子供の目的意識と可能性を引き出す支援室」「解らない子供たちへの対応策 OB教師の指導を頂く」「夕食後、テレビをいったん消しましょう」「自然児のまち おおつき」「歩いて、歩いてコミュニケーション」

「みんなでチャレンジ！大月市 検定試験」「山梨県大月市 おおつき学園（小中一貫校）」
「放課後の子供たちを救おう！もう一つの学びの舎アフタースクール」「〇〇基金の設立」
という提案も出まして、この中のものをまとめて提案しようと思ったのですが、時間もな
かったことからこのように多くなっています。これらの提案内容について掻い摘んで説明
したいと思います。

まず、「教えないで教える教育を！」ですが、次の3つ（「絵本（お話）で包む豊かな大
月市」「子育て時代のワークシェアリング」「味も匂いも本物の地元食材で食育を」）に繋がる
テーマであります。幼児教育は義務教育の準備教育ではなく、人間として生きていく基
本の教育であり、子どもが「知育」ではなく、楽しい、面白いと感じる活動を、遊びを通
して体験させることが必要ではないかと考えました。また、これを幼稚園や保育園などの
施設での教育と家庭教育の両輪でやっていかなければ前に進まないのではないかと考えま
した。

では、大月市としてはどうすればいいのか。考えたことは、「見るもの 聞くもの 全て絵
本の町」ということです。大月市の全体をお話として捉えることです。大月の町中で壁の
シャッターに絵が描いてありますが、これはお話になるのかなとか、町全体を絵本にする
と考えました。

「大月図書館は親と子の夢育てホーム」では、図書館の仁科館長は絵本作家というこ
とで仁科館長に協力していただければと思っています。子どもたちに豊かに育ってもらうた
めには、ゲームばかりやらせるのではなく、本の読み聞かせをして、創造力や夢を持って
もらうことが必要であるという内容です。これは絵本を集めれば良いということではなく、
量より質ということで、内容を重視したものをやっていけば、コストもかからず、不足す
ることもないのかなと思います。さらには、仁科館長から親も子どもも学び、自分なりの
絵本を作ってみるということも良いのではないかとこの提案でした。

「子育て時代のワークシェアリング」では、共働きが多い中、子どもが出来るとお母さ
んは働けなくなってしまいます。少子化なのに働くことができなくなるということは、次
の子どもも産めなくなるという状況になるのではないかと考えました。そこで、3つの考
えが出ました。①仕事を受け付ける専門窓口、②都合の良い時間で働ける、③収入額の相
談窓口です。これは、仕事をしたくてもどこに行ったらいいかわからないことや、普通の
仕事が出来ない状況になったときに、特殊な専門的な答えがある窓口があればいいなとい
うことです。さらには、その中で都合の良い時間、8時間働いてほしいが2時間しか働け
ない、午前中だけとか、夜だけとか、融通の利けるような状況や、働くことはできたが思
ったより収入が少なく、働いても無意味だったり、余計に疲れてしまったりすることから、
そのような相談に対しての窓口を、市民も協力しながら大月市として設置したらどうかと
考えました。

「味も匂いも本物の地元食材で食育を」では、親子農園、家族農園、一坪農園というこ
とで、大月市は自然豊かな地域であることから、農薬等をなるべく使わないで、安心して

子どもに食べさせる野菜で子どもを育てようという考え方です。

この3つの考え方（「絵本（お話）で包む豊かな大月市」「子育て時代のワークシェアリング」「味も匂いも本物の地元食材で食育を」）が、教えないで教える教育に結びついていく、それが「大月らしさ」になればと思います。

次に、小学校や中学校に関係するものを4つ提案します。まず、「各学校区に地域を上げての学校応援団組織を作る」では、学校だけにすべてを任せるのではなく、親にも負担をかけるだけでなく、地域にも協力をしてもらおうという考えの下、地域が学校を応援していく、先生の負担を減らすことができないかというものです。その中で、いろいろ調べたところ、モデルケースとして、初狩小学校がこのような取り組みを行っていました。初狩小学校には、体験活動支援、強化学習支援、安全安心支援、環境人材育成支援、子育て支援の5つの部会があります。学校とPTAを応援する地域の方々、公民館長や区長、老人クラブ等の団体がフォローアップしており、なるべく学校の負担を軽減するような地域づくりを行っています。そこで、その組織づくりを初狩だけではなく、大月市全体として捉える組織が出来ないかと考えました。

「子供の目的意識と可能性を引き出す支援室」では、資料にはない提案であります。一度削除しましたが、これも入れた方がいいかなと思い再度提案することにしました。子どもがなりたい、やってみたいと思う気持ちや夢が芽生えたときに、親と先生がサポートする役割を明確にしたプログラムづくりをしたらどうかというものです。例えば、子どもがパトカーを見たときに目を輝かせて乗りたいと言って、親の助けを得てパトカーに乗ることができて、そこから警察官になりたいという夢が芽生えたとき、警察官になるためのプロセスを親と先生の助けの下、夢に向かってやっていくという支援室が出来れば、夢が叶うまちとしての大月市になるのではないかと考えました。

「解らない子供たちへの対応策 OB教師の指導を頂く」では、学校は時間と期間が決まっている中でどんどん流れていきます。その中で、解らないまま進級してしまう状況もあるかと思いますが、そこで、そういう子どもたちに対して、大月市にお住まいで定年退職されたOBの先生方に指導をいただくという内容です。これに関してはコストがかかるということが課題としてありますが、何とかボランティアでできないかと考えました。そうすることで、がんばっている先生方の負担を減らすことができます。また、共働きで働いている家庭であれば、親は中々教えられない状況だと思いますので、そのような状況の子どもたちに勉強を教えることができます。この提案は、大月市に住んでいる先生方にご活躍いただいて何かできないかということで考えました。

「夕食後、テレビをいったん消しましょう」では、先ほどの背景にもありましたが、テレビを2時間以上観ている割合が全国平均より高いということで、これはあまり言うところですが、そういった現実がある中で、なるべく一日の中で家族の時間をもち、家族との対話を大切にしようということ为前提としてコミュニケーションがとれればいいのかと思います。これをするによって、家庭教育の充実にもつながるのではないかと

と思います。保育園、幼稚園などの施設や学校だけが教育ではありません。「知育」だけでなく、家庭の中で会話をすることの大切さを講じて、例えば家族日記とかを付けて、発表できる場が出来ればいいかなと思っております。それを市が主導するのではなく、市民が主導して、大月市がそれをフォローアップできればという体制ができればいいのではないかと考えました。

次に「自然児のまち おおつき」です。これは既に実践している感覚もあるのですが、やはり自然を生かさなければいけないということで、大月の自然を利用して、自然に親しむ子どもを育て、成長を図ります。山、川、野原歩き、野生動物観察、昆虫を知る、木や鳥を知る、魚を知る、星を知る、田や畑で作物を知って作るなど。この作物を作るに当たっては親子の家庭菜園につながっていきます。これまで当たり前に行っていることをもう一度見直しをして、組織的に構築してできないものかと考えました。また、自然をただ親しむだけではなく、厳しいことも感じてもらい、厳しい環境に置き、忍耐力や社会に出て立ち向かえるような精神力を養い、そこから「大月人」や「自然児」「大月児」を育てることが出来ればいいかなと思います。これに関しては、学校や市に頼るのではなく、ボランティアを募って、自然指導員や山のガイドの方たちと、活動を一緒になって出来ればいいのかと思います。大月にはシオジの森やロハスなどいろいろありますので、そういうところも活用できるのではないかと考えます。また、実際に大月市もわいわい道中などの活動を行っていますので、そういう情報発信も必要かなと思いました。そういった活動をもっと少しブラッシュアップして、市内だけでなく、市外からも人を呼んで、大月のまちっていいなと思ってもらって、ここに住んでもらうきっかけになるようなプログラムが出来ればいいかなと考えました。

「歩いて、歩いてコミュニケーション」では、先ほどの背景の中で述べた、体力面、能力面が都会の子どもと変わらない点について考えました。最近スクールバスが学校の前まで、あるいは家の前まで来て子どもたちが歩くことが少なくなっています。そこで歩かせれば体力が付くのではないかという軽い発想から始まりました。当初はそれだけで考えていましたが、それだけではインパクトが弱く、道が危ないという部分があることから、道路整備の改善を考えましたが、莫大なお金がかかりそこまでは出来ませんし、また、保護者からも危険だと言われてしまいます。そこで考えたこととして、学校は避難場所になっていて、最近ハザードマップを作成したと思います。そのハザードマップの状況を書いた通学路の地図を作成してみたらどうかなと思いました。この活用としては、その地図には通学時間や道路規制などが書いてあり、その地図を学校周辺の地域にも配って、地域の住民も子どもたちを見守りながら歩かせる。そうすれば、安全が確保されながら出来るのではないかな。それでもまずい場合は、地図に危険エリアの部分を落とし込むことによって、地域住民同士のコミュニケーションの一助になるのではないかなと思います。そういったことも出来ればいいのかなと思います。既に実践している地域もあるかもしれませんが、市全体として、「安心して長い距離を歩ける自然のまち」というまちづくりを目指すこともい

いのではないかと考えました。さらには、これによって住民同士の顔が分かるようになり、災害時には、地域住民同士が助け合える状況になるのかなというイメージを持ちながらこの提案に付け加えました。

「みんなでチャレンジ！大月市 検定試験」は、イベント性を持たせています。漢字検定や英語検定を市レベルのお祭りとしてやれば面白いかなと思いました。これは年齢制限がなく誰でも参加できます。子どもだけに勉強を押し付けるのではなく、大人も一緒に子どもと向き合います。高齢者においても脳トレになり、認知症予防にも繋がると思います。家族全体で学習に取り組むことによって、家庭のコミュニケーションも醸成できるのではないかと考えました。また、英語検定での最優秀者には、短期留学をさせてみたらどうかということで、その支援を受けられる支援室を作ってみたらどうかと思いました。本物の英語を体験することで、英語力が身に付き、そのようなまちであってもいいのかなと考えました。あと、漢字検定、英語検定の合格者には、かがり火まつりなどの人が多く集まるイベントで市長から合格証を授与してもらえば、子どもたちは評価されることが喜びになり、学びへの意欲が向上するのではないかと考えました。

「山梨県大月市 おおつき学園（小中一貫校）」は、病気や経済的な理由以外の何らかの心的、身体的、社会的要因によって、登校したくてもできない子どもたちのための体験型学校です。まず、体験をしてもらって、興味が向いたら自信が持てるよう人材育成します。子どもたちの状態に合わせて心の安定を図りながら、適切な学習、集団活動、体験学習を取り入れて、社会性を養います。そうすることで自信を持っていただきます。その後、もっと深い考えになると、自然から生命の大切さや豊かな心を学び、問題解決能力を備えるまでの人材を育てる学園を目指してみたいかかと考えました。この提案はハードルが高いので、あくまで提案であります。結論はまだ出ていませんが、提案はいくらでもできるので提案させていただきました。

「放課後の子供たちを救おう！もう一つの学び舎」は、先ほどの背景の学童教室の中で、見守る人が1人か2人しかいない状況があり、子どもたちが何十人もいると、外は危険だということで、教室から出られません。その部分の1つの解決策として、プログラムを作っていくのはいかがかという提案です。例えば市民先生、放課後先生では、住民が先生となって、教えるプログラムやプロジェクトを立ち上げてはどうかと考えました。大工や調理師、いろいろな技術を持っている人たちの仕事の話をして体験までできるようにします。このようなプロジェクトを立ち上げられればいいかなと考えました。そういう体験をすることによって、大人になるのが楽しみになったり、どうやって学んだらいいのかななどの夢や希望を持ってもらうための放課後のもう1つの学び舎としていかがかなと考えました。これは市と民間の協働を考えました。なるべくこういうことは民間が行って、市がフォローアップするという形になれば市の負担も減ります。またその中に地域住民が先生として入ることによって、市と民間と地域が三つ巴になっていいものができるのではないかと考えました。

「〇〇基金の設立」ですが、子どもの頃に美術や芸術に見て、聞いて、触れることで、多くの夢を抱けるように、様々な支援の必要性があるのではないかと考えました。大月市には美術館や劇場などが少ない中、観に行くには経費がかかってしまいます。それは大変な負担になったりしますので、その部分でフォローアップできないかと考えました。また、設立については、補助金に頼っているのでは立ち行かなくなると思いますので、個人・企業・団体から支援を仰ぎ、子どもたちに本物を体感、経験してもらうための基金の設立ということを単純に考えていましたが、他の提案にある「子育て時代のワークシェアリング」「学校応援団」「支援室」「OB教師の指導」「アフタースクール」「相談窓口」など、ハコモノだけではなく人材の登用にかかる費用について、市の負担で賄うのではなく、住民や市内の法人に、お金や人材の提供をお願いしたらどうかと考えました。1つの基金の設立をきっかけに、点を線で結ぶネットワークを構築できたらと考えました。子どもに多くの夢を見させるための基金を設立して、生きたお金を使っていただいて、大月に生まれて良かったと思えるような子どもづくりを出来ればいいかなと思い、従来の提案を少し広げさせていただきました。

最後に、さあここからどうなるんだ？という話で、我々Cグループは終わってしまいました。本当はもう少しブラッシュアップして、いいものを作ればと思いましたが、今日の発表に至りました。以上です。ありがとうございました。

(4) 質疑・意見等

その後、参加者の間で質疑・意見交換等を行った。

(5) 講評

【石井市長】

皆さん方の9回にわたる集まりの中で、いろいろなお考えを出していただきました。今回の展開は、市の方からこれとあれというような目標値は敢えて出しませんでした。これが市民の真の声であろうと思います。その中で、皆さん方のご意見をうかがう中では、大月は何を目指していくのかということだと思います。この目指すべき方向は、ここに住む人間がいかにかこのまちを愛するかということであり、自信を持ってこの大月のまちに住んで良かったと思えて、自分たちが思い、考えられるかどうかであり、そのようなまちづくりを目指していくことが最も重要であろうと思います。

今、核家族化の中で、人と人のつながりというのが希薄化しています。その中であって、特に教育の部分では、いろいろな問題があるのでたくさんの意見が出たのかなと思います。このことを、大月の人づくりという意味では1つの足掛かりとして、出来る範囲の中で、1つずつ進化（深化）させていくということが必要であろうと思います。私自身がこの自

然というものを大事にしながら、ここに住む人たちが生きる糧として自然が有効に活用できるような地域づくりを目指していくことが基本であろうと思います。

現在、山梨県の人口は83万人であります。この山梨県を育って出て行った方は約200万人という数字になっています。この大月のまちは特に首都圏から近いというところから、これまではそれぞれの家庭教育の中で、首都圏を目指した教育であったのかなと思います。逆に、これからは、大月のまちなりの良さというものを子どもたちに十分教育するという事。そして、人間らしい生き方をするという事。それがこの大月で出来るというところを、今後の方向性として進めていくことが、皆さん方が築き上げたいろいろなテーマの中の共通する部分ではないかと感じました。

我々も、そのような方向を目指してこれまで進めてまいりましたが、これからもこの考えを基本といたしまして、この流れに沿った方向性を定めていければと思っております。皆様方にも知恵をもっと絞り出していただいて、共にこの大月のまちなりの将来について、夢のあるまちづくりを考えていきたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。これからは是非、皆様方の知恵を出していただいて、我々も一層磨きをかけながら、共に力を合わせて頑張っていくことをお約束させていただきます。よろしくお願いいたします。

【佐藤副議長コメント】

ありがとうございます。石井市長から力強いコメントをいただきました。それでは時間になりましたので、これで企画提案のプレゼンテーションを終わりにいたします。

今日の形式としましては、この企画は我々大月みらい協議会で共用して、そして正式に市の方に提示させていただくということで進めていきたいと思っております。

皆さんお忙しい中大変だったと思いますが、大月みらい協議会として、何とか企画をまとめることができましたことに、私の方からも感謝を申し上げて進行を閉じさせていただきます。ありがとうございます。

4. 今後の日程について

○次回会議は、市の総合戦略の素案を審議していただく予定。素案が出来次第、日程等を調整の上、開催する。